ドキュメンタリー映画を通して見る死生学

高橋 都

一 はじめに

グローバルＣＯＥ「死生学の展開と組織化」では、「生と死を考える映画上映会」と題して二〇〇八年に二度の学内映画上映会を開催した。学術プロジェクトの一環として映画上映会を開催するのはやや異色かもしれないが、映画作品を共に観ることで参加者が人間の生と死に向き合い、さまざまな感想をわかちあう機会となった。本稿では、二つの上映会を企画・実施するに至った経緯と上映会の様子、そして二つの作品の監督との対談について報告する。とりあげた作品はいずれもドキュメンタリー映画であり、「ひめゆり」（柴田昌平監督、二〇〇七年作品）、そして「チーズとうじ虫」（加藤治代監督、二〇〇五年作品）である。

二　ひめゆり平和祈念資料館の証言員との出会い

第一回上映会にとりあげた映画「ひめゆり」の存在を知ったのは、二〇〇七年三月二〇日、春休みの旅行の折に沖縄本島の南部戦跡をめぐっていたときのことだ。何度も沖縄に行きながらひめゆりの塔を訪れたことがなかった私は、かつて伊原第三外科壕として使われた大きなガマ（自然洞窟）の上に立つ記念碑を見たあと、その脇に立つ「ひめゆり平和祈念資料館」に入ってみた。「ひめゆり部隊」については戦時中の悲劇として小説や映画の題材になっていたことは知っていたものの、それ以上の知識を持ち合わせていなかった。

館内マップを見ると資料館は第一から第五展示室に分かれ、それぞれ「ひめゆりの青春」「ひめゆりの戦場」「解散命令と死の彷徨」「鎮魂」「回想」というテーマがつけられていた。第一展示室「ひめゆりの青春」では動員前の女学生たちの学生生活の記録が展示され、仲良しグループがポーズをとった写真や体育授業の風景などが並び、戦時下とはいえ沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校という名門校で学ぶ知的好奇心と将来の夢にあふれた十代後半の少女たちの青春の日々が記録されていた。[1]

そこから第二展示室に移ると、暗い照明の部屋の中に、看護要員として突然動員された女学生や負傷兵の様子を説明するパネル、戦後に壕の中から発見された学生たちの所持品や医療機器の実物、病院壕の内部を模したジオラマなどが展示されていた。

それらの一つ一つを見ていたときである。後ろに立っていた女性が突然話し始めた。

「あのときは本当に……」

始めは資料館の入館者がそばの誰かと話しているのかと思ったが、会話ではなく、淡々と話が続いている。振り返ると、目の前に立っている高齢の女性が一人、誰に向けてということもなく話し続けていた。

「え?」

その女性は、看護要員として働いていたときの状況を話しているようだった。一〇秒ほど彼女を見つめたあと、ようやく、目の前に立つ女性がおそらくひめゆり学徒隊の生存者であり、入館者に向けて自らの体験を語っているのだろうと思い至った。彼女の周りには徐々に人が集まり、さまざまな年代の入館者が五、六名、取り囲むようにして話に聞き入った。その脇を通り過ぎて次の展示室に向かう人々もいた。話を聞く内に、この資料館では学徒隊の生き残りの方々が交代で第二展示室に立ち、証言員として自らの実体験を語る活動をしていることがわかった。証言は入館者へのアナウンスなどなしに、多目的ホールではなく、展示室のフロアでいきなり始まったのである。

「本当に一週間くらいで帰れると思っていたんですよ。辞典やノートも持って行きました。私たちは何も知らなかった。だから、まさか、あんなことになるとは思ってもいなかったですね」

看護補助を目的とした一時的な動員と聞かされて出かけた学徒たちは、傷病兵用の二段ベッドを設置する横穴を掘る手伝いから始めたという。

「壕の中はすごい状態でした。暗くて、薬はない、何もない、足の踏み場がなくて私たちが横になって休む場所もない。あちこちで兵隊さんが、学生さ〜ん、学生さ〜んと呼ぶんです」

「おかしくなる人もたくさんいました。突撃〜、突撃〜、と叫ぶんですね」

「壕の中は二段ベッドですが、上の兵隊さんが動けなくて、下痢便を流してしまうとそのまま下にいる兵隊さんの顔にビチャビチャかかって、でもその人も動けなくて、学生さ〜ん、何とかしてくれ〜と言うんです」

その証言員の女性は、大袈裟な説明ではなく、むしろ淡々と実際の状況を一つ一つ思い出すように語った。励まし合いながら一緒に働いた友人たちの死の状況も語られた。話のリアリティと、その凄惨を極めた状況を

彼女が十代後半の女学生として体験したという事実にただ圧倒され、とても話の途中で次の展示室に動くことができないまま二〇分ほどがたった。

「何が起きたのか、知ってほしいと思います。私たちが語って伝えないといけないことです」

「戦争は止められます。教育も大人の力も大事ですが、平和を守るためには一人一人が、誰かに命じられるのではなく、自分で判断しなくてはいけません」

話が一段落したあと、彼女をとりまいていた入館者たちは声にならない溜息をつき、口々に「ありがとうございました」と言って次の展示室に移動していった。何人かは目を真っ赤にしていた。証言員の女性は、一人一人の手を握って、静かに言った。

「聞いてくれて、ありがとう」

その日は、三名の証言員の方の話を聞いた。次の展示室に進んでも、第二展示室ではまた別の方が話しているかもしれないと気になり、展示室の間を行ったり来たりすることを繰り返した。

三人目に話を伺った女性は、動員直前に本土に疎開したためひめゆり学徒隊に入ることを免れた方で、友人たちと行動をともにしなかったことへの慚愧の念を強く持っておられた。

「私は逃げたんです。本当なら、ここに立っている資格はないんです」

何度もそう繰り返しながら、戦時下の状況、それでも楽しかった学園生活、亡くなった友人達のために証言を続けていること、そして疎開を迷う自分に、生きるために沖縄を離れることを強く勧めた教師のことを詳細に語った。

「私は、先生のおかげで生きることができました」

「第四展示室に、亡くなったお友達や先生の写真があるでしょう。そこに、先生のお顔の写真もあります。

どうぞ、見ていって下さい」

続く展示で、一九四五年の三月二三日に看護要員として動員された二二二名の生徒と教員一八名のうち、生徒一二三名と教員一三名が命を落としたことを知った。一五歳から一九歳の女学生たちは、人の死を目の当たりにした経験や準備もなくいきなり現場に放り込まれ、米軍が本島に上陸した四月一日以降戦況が悪化すると、指示されるままに手術を手伝い、切断した手足を運び、排泄物を処理し、遺体を埋め、水や食料を運び、壕の外に出て砲弾が飛び交う中を伝令に走ったのである。そして六月一八日には陸軍の一方的な解散命令によって軍の庇護を失い米軍が包囲する戦場に放り出された。第四展示室には、学徒隊に動員されなかった方々も含めて沖縄戦で亡くなった二〇〇名以上の生徒と教員の遺影が飾られていた。ついに遺影が見つからなかった生徒も一〇名いるという。それは、「ひめゆり」という集合体ではなく、一人一人の女学生や教師の人生の途絶が実感として迫ってくる展示であった。

戦後も、生存者は自分が生き残った罪悪感に苛まれたという。壕の中に瀕死の友達を残して移動を余儀なくされたこと、亡くなった友達の親から最期の様子を聞かれる辛さ、「ひめゆり」を題材とした小説や映画が現実とはほど遠いフィクションであることへの怒り。さらには、他にも大きな犠牲を払った学徒隊が複数あったにもかかわらず「ひめゆり」だけが注目されることへの抗議の声。生存者の中には、ひめゆりの一員であったことを隠し続けた方も少なくなかったという。両校の同窓会によって平和祈念資料館が設立されるまでに終戦から四四年を要した。

展示を最後まで見終わったときには、しばらく言葉が出なかった。証言員の方が三人とも淡々と、しかし彼女たちの話に聞き入る入館者の目を見ながら話をしていたこと、何度も話しているはずなのに、ご自身が目を潤ませる場面もあったこと、そして最後は「聞いてくれてありがとう」という言葉で話が締めくくられたこと

が、強く印象に残った。心のかさぶたを剥ぐようなことを、予備知識の少ない入館者に、しかも足を止めるとは限らない相手に向かって話すためには極めて大きな心的エネルギーが要る。すでに八〇歳前後になった生存者の方々が証言活動を続けていることにお礼を言うべきなのは入館者のほうだと思った。

展示室からロビーに出て一息ついたときである。壁に一枚のポスターが貼られていることに気づいた。全体の三分の二以上が青い空、その下に岩場と海岸が広がり、セーラー服を着た一人の女学生がこちらに背を向けて海を見ている図柄である。右上に、＝「忘れたいこと」を話してくれてありがとう＝というキャッチコピーがつき、「三月二三日、那覇市桜坂劇場で公開」と書かれていた。学徒隊生存者の証言を集めたドキュメンタリー映画「ひめゆり」の公開を告げるポスターだった。資料館の中では、証言員の活動とは別に証言ビデオも流されていたが、今回公開されるドキュメンタリー映画は、一三年間にわたって収録した二二名の元学徒の一〇〇時間を超すビデオを編集したものだという。監督は、正確な記録を残したいという生存者の依頼を受けて資料館用の証言ビデオを製作した柴田昌平氏。柴田氏は、「ひめゆり平和祈念資料館」の展示リニューアル事業の総合プロデューサーもつとめていた。本作品はひめゆり学徒隊に関する初めてのドキュメンタリー映画であり、柴田氏が代表をつとめるプロダクション・エイシアと、沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校ひめゆり同窓会の共同製作ということだった。公開予定の三月二三日は学徒隊が動員された日である。

＝「忘れたいこと」を話してくれてありがとう＝

これ以上、元学徒の証言を集めた作品にふさわしいコ

映画「ひめゆり」ポスター
© プロダクション・エイシア

ピーがあるだろうか。ポスターを見た瞬間に、この映画は見なければならない、他の人たちにも見てほしいと強く思った。

三　映画「ひめゆり」

同じ二〇〇七年六月、二一世紀ＣＯＥプロジェクト「死生学の構築」を引き継いだグローバルＣＯＥ「死生学の展開と組織化」がスタートした。領域横断的に死と生を考える本ＣＯＥに医学部から事業推進委員として参加する機会に恵まれたとき、映画「ひめゆり」の学内上映会というアイデアが浮かんだ。映画上映のだんどりなど何も知らなかったが、とにかく提案してみようと考えた。

実際に映画「ひめゆり」を見る機会を得たのはそれからさらに数カ月後、高崎映画祭のときである。映画は、第一章「戦場動員と看護活動」、第二章「南部撤退から解散命令」、第三章「死の彷徨」という三部構成で時系列に沿って進む。ナレーションは一切なく、戦況を説明する図や字幕が時折挿入されるほかは、全編が生存者の肉声のみで構成されていた。ほとんどの証言は、元学徒が実際に看護活動をした壕や、解散命令後に多くの学友や教員たちが追い詰められて命を落とした本島南端の荒崎海岸など、凄惨な出来事が起きたまさにその場所に出向いて収録されていた。戦後六〇年を経てもなお、「あの岩の陰で……」「〔ガマの〕このあたりで……」と、場所を同定しながら当時の状況をつい昨日のことのように話す姿が印象的であった。

二時間一〇分の作品の最後は、ひめゆり資料館で証言活動をする元学徒、新崎昌子さんの姿で締めくくられていた。第四展示室で友人たちの遺影を前にして、新崎さんはカメラに向かって穏やかな表情で話す。

「五六年という月日がここに来ますと、つい最近のような感じです。だって〔友達は〕別れた時の顔をしてい

一六歳の同級生は現在も一六の顔で微笑んでいるんですよ。私の孫と同じ年なんですよ。私もね、いつかあの世に行く時には、たくさんお土産、平和な時代のお話のお土産をね、いっぱいもっていって、平和な時代を味わえなかったお友達に、こんなこともあったのよ、あんなこともあったのよと、いっぱいお土産をもっていきたいなと思います。それまではね、元気で、若い世代に語り継いでいきたいなと思います。私の今のいきがいにつながっております」

言葉にするのは難しいが、悲惨な状況の証言で構成された映画でありながら、生存者の方々がそれぞれの戦後を生き抜いて今に至り、新崎さんのような心境に至ったことに深い感銘を受けた。三月に資料館を出たときには事実の重みに打ちのめされる思いだったが、映画を最後まで見たあとは、生存者の存在自体によって励まされるような、確かなエネルギーを与えてもらった気持ちになったのである。この映画は、自分たちが納得できる記録を残そうとした元学徒と、彼女たちが納得できる記録を残す手伝いをする覚悟を決めた製作スタッフとの、まさに共同作品だと思えた。

資料館での生存者の証言活動や映画「ひめゆり」に強く心を動かされた理由の一つには、私自身が仕事の一環としてがん体験を持つ方々に聞き取り調査を重ねていたことも影響していたかもしれない。がん体験を持つ方の話を聞く過程では、人が（起こらなければよかったと思う）出来事をどのような気持ちで語るのか、何のために語るのか、について考える機会が少なからずあった。だからこそ映画「ひめゆり」のポスターにある＝「忘れたいこと」を話してくれてありがとう＝というコピーが強く印象に残ったのだろう。戦争体験については、一生話せないまま、あるいは話さないことを選んだまま逝く方も少なくない。その中で、元学徒の方々が長い年月を経て敢えて話すことを選んだ背景には、「自分たちが語り継がねばならない」という決意に加えて、製作スタッフに対して「この人たちになら話せる」「この人たちなら残してくれる」という確固たる信頼

があったのではないかと想像した。長く口を閉ざしていた元学徒が忘れたい記憶を呼び起こして語ろうと決意するに至った経緯、そして製作スタッフが、その証言をどのように聞き、受けとめ、記録したのかも知りたいと思った。それは、がん治療を受けた当事者のインタビューを重ねていた研究者の立場からも、ぜひ教えてほしいことであった。

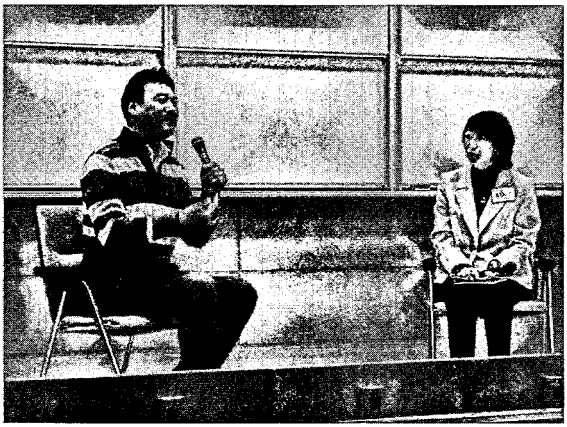
四　第一回「生と死をめぐる映画上映会」

映画「ひめゆり」の上映会はグローバルＣＯＥ「死生学の展開と組織化」の運営会議で承認され、第一回「生と死をめぐる映画上映会」という形でいよいよ実現することになった。具体的な準備に入る時点ですでに本作品は、文化庁の文化記録映画賞大賞やキネマ旬報ベスト・テンの文化映画部門の第一位をはじめとした数々の賞を受け、作品としての知名度も一気に高まろうとしていた。映画「ひめゆり」の公式ホームページには自主上映の手続きを説明するセクションが立ち上がり、フィルムの貸出料や監督・プロデューサーに講演を依頼する際の費用も公開されていた。これらの情報は、上映会を具体的にイメージして企画する上で大きな助けになった。また、同ホームページで公開されて頻繁に更新されていた柴田監督のブログからも映画製作の背景を知ることができ、映画に関連した発信が多角的になっていることを実感した。

製作プロダクションとの調整を経て、上映会は年が明けた一月一一日に医学部鉄門記念講堂で開催と決まった。できる限りの広報をしたつもりだったが、実際にどれほどの聴衆が集まるのか予測できず、不安が募る中で迎えた当日。金曜午後五時スタートという時間設定にもかかわらず一〇〇名以上の聴衆が会場に集まったのを見たときには、正直安堵した。参加者アンケート（回答者数六〇名）では、学内の学生・教職員と学外から

の一般参加者が丁度半々、参加者の年齢は十代の高校生から七十代の方まで幅広い年代におよんでいた。参加者の中には、通勤途中に本郷キャンパス内を通り抜けているとき、掲示板に貼られた空色のポスターに目をとめたという沖縄県出身の男性もおられた。二時間一〇分の上映時間はあっという間に過ぎた。

上映後の対談で柴田監督は、元学徒の証言を記録するプロセスを詳細に語ってくださった。当初同窓会側からの依頼は長くても三〇分のビデオ製作であり、台本もすでに用意されていたという。しかし、とにかく一から話を聞いてみようと考えた監督は、証言者名簿の一番上に載っていた方に頼み、荒崎海岸に同行してもらった。地形もかなり変わっていたが、海岸に着いて二〇分くらいたったとき、まるで急に記憶の糸がつながったように、彼女が話しだした。それは封印してきた記憶が一気に解き放たれたような「言葉のシャワー」だったそうである。口をはさむこともできず聞き続けて二時間半。監督は、まだ語られていないことがこれだけあること、自分たちは何も知らないのだということを痛感したという。



柴田監督との対談

台本を棚上げして収録を続けることにした監督は、製作スタッフと三つの約束事を決めた。第一に、収録はできるだけ現場で行うこと。第二に、スタッフはひたすら話の受け手となり、話題をスタッフ側が聞きたいことに誘導しないこと、そして元学徒自身が十分に話し終えたと思うまで何時間でも収録を

やめないこと。[2] 第三に、撮影にあたっては映像的な演出を極力排すること。カメラは証言する元学徒の目の高さにフラットに置き、アップを避け、なるべく普通の目線、普通のサイズの撮影にすること。これらの約束事を聞いて、映画を観る側もまるで、湿ったガマの中やゴツゴツした岩場の上に立って一緒に元学徒の話を聞いているような錯覚に陥る理由がわかったような気がした。

聴衆から、一三年間元学徒とふれあうことで自分の死生観が変化したかと質問された監督は、「ひめゆりのおばちゃんたちと一緒にいると、本当に周りに、当時一六歳や一七歳だった人がいつも一緒にいるんですよ。ひめゆりの人たちというのは一人で歩いていても、その周りにいろんな友達が一緒について歩いているんだなと。本当に僕にとってよかったのは、確かに存在していた命が、形ではなく、物理的にはなくなったけれど、今でも存在していると日常感覚の中で受け入れられるようになったところが大きな影響だと思っています」と答えていた。また、ひめゆりの続編製作の可能性については、これまで体験を語ることができなかった生存者のうち映画を観た方の中から「自分も話してみてもいい」という申し出が出てきたことに触れ、「第二弾にまとまるかどうかはわからないですけれども、ともかく〝話せてよかったな〟と思ってもらえるような形で記録ができたらと考えています」と話された。生存者の証言を残すことが重要であり映画製作はその延長にあるというスタンスは、監督はじめ製作スタッフと元学徒との関係を物語っていると感じた。

上映会は、参加者にも強いインパクトを残したようである。参加者アンケートには、「生の声というのは、いかに力強いものなのか、思い知らされた。（三十代、留学生）」、「今日のことを周囲に伝えていきたい。（五十代、教職員）」、「今生き永らえて平和のために何かをしなくてはと思う。（七十代、一般）」「証言をもっと聞きたい。（五十代、一般）」といった言葉が並んだ。「生と死の別れ目は、その人が居合わせた場所、周囲の人の

考え方に大きく左右されていた。これを運命と呼ぶのだろうか。」と書いた学生は、新年度から防衛省勤務がきまっているという。「次、帰省したら祖父母に話を聞いてみます。」と書いた沖縄県出身の学生もいた。

以下は、当日寄せられたコメントの抜粋である。〔（　）は原文のまま。〕

雨の降りしきる音、雲の流れる様、赤花の映像が印象的だった。彼らは戦争の前も、戦争中も、そして戦争が終わった今も、何も言わないけれどずっと人間の営みを見てきたんだと思った。梅雨期の沖縄での地上戦はどんなに悲惨なものであったろうか。しかも地中に掘った壕の中での毎日。むせかえるような空気で窒息してしまいそうである。最後の方が語った「冥土への、平和な時代のお土産」という言葉が心に残った。ああ、今は平和な時代なんだなと気づかされた。静かに深呼吸してみたくなった。恥ずかしながら私は沖縄出身でありながら、沖縄戦の真実をあまり知らない。ストーリー化された「沖縄戦」ではない、ありのままの沖縄戦について知りたいと思った。（十代・二十代、学生）

言葉では言い尽くせない想像を絶する程の惨状、その中でのはかない命、また極度の緊張感と恐怖、死への覚悟……。現在ではありえない、遠いと思える現実の中で、仲間のいのちを必死で守り、痛みを今に至るまで共にしようとしている生存者の方々たちの姿がまさに泉のような存在であった。（三十代、学生）

何かをただ知るためでなく（勿論、知った気でいるというおそろしい傲慢さに気づきました）これから更に知っていくための「欲望」を喚起されました。その意味で稀有の映画でした。（三十代、学生）

確かに映画「ひめゆり」は、見た後に「もっと知りたい」「知らねばならない」という気持ちをかきたてられる作品である。もうひとつ特筆すべきなのは、これだけの悲惨な証言を聞いたあとでもなお、映画を見終わったときに、聴衆の中に前向きな深い感動が残ることである。それは、この映画に証言を残した生存者の存在自体が持つ力に他ならない。柴田監督も対談の中で、撮影は「難行苦行というよりも、もっと聞きたい、また話を聞きに行こうという気持ちでやっていた」「沖縄に行って撮影をするたびに背筋がピンとのびた」と語っていた。上映会報告を雑誌「緩和ケア」に寄稿してくれた佐藤（佐久間）りか氏（DIPEx-Japan 事務局長）は以下のように述べている。[3]

「ひめゆり」では、これだけの過酷な体験をした人たちが、その後教師として働いたり、結婚して子どもを育てたりして、戦後五十年を生き抜き、今は一見どこにでもいるような普通のおばあさんになって、こうして語っていること、そのこと自体に大きな感動を得た。これまでのドラマや映画に描かれてきた反戦のシンボルとしてのはかない「ひめゆり」ではなく、戦争の傷跡をたちまちに緑で覆い隠してしまう、圧倒的な沖縄の自然を象徴するような逞しい「ひめゆり」であった。

おそらく、これは多くの聴衆が共有する感想であろう。

四　映画「チーズとうじ虫」ホームビデオがドキュメンタリー作品になるとき

さて、第一回上映会の好評を受け、第二回も企画することになった。第一回の時にはとにかく映画「ひめゆ

り」を上映したいという一心だったが、今度は上映作品の候補を挙げるところから始めねばならない。必ずしもドキュメンタリー作品に限定する必要はなかったが、映画「ひめゆり」で証言を記録するという行為の意味を考えたあとだけに、生と死についてまた別の角度から何かを「記録」した映画を観てみたい、という気持ちがあった。そこで、我ながら単純なやり方だとは思ったが、まずGoogleに「生と死」「ドキュメンタリー映画」と入れて検索してみた。すると、出てくる、出てくる。各地のドキュメンタリー映画祭、個人のブログ、個々の映画の公式ホームページ、ドキュメンタリー映画のメールマガジン……。世の中にはこれほど「生と死」に関わるドキュメンタリー映画があるのかと驚いた。しかし考えてみれば、人間の営みを記録しようとするときに「生」とその延長にある「死」が視野に入ってくるのは、当然なのかもしれない。

国内外のドキュメンタリー作品を眺めているうち「チーズとうじ虫」[4]という風変わりなタイトルの作品に目を引かれた。二〇〇五年の日本の作品で、作品の公式ホームページによると、がんで余命一年と診断された最愛の母の看病のために故郷に帰ってきた娘（監督）が、三年たってもまだ元気でいる母親を見て病気が治る奇跡の物語をつくろうと思い立ち、映画学校のドキュメンタリーコースに通いながら、母と高齢の祖母と自分自身の日常風景を家庭用ビデオカメラで撮った作品だという。職業的映像作家である柴田監督を中心としたチームがつくった「ひめゆり」とは対照的に、記録を撮ろうと思い立ってから映画学校に通った、ほとんど「素人」が自分の家族を撮って一人で編集したセルフドキュメンタリー。ところが映画学校の卒業制作として提出されたその作品

映画「チーズとうじ虫」ポスター
©「チーズとうじ虫」上映委員会

加藤監督と母（旅行中のシーン）
©「チーズとうじ虫」上映委員会

が評判になり、プロの手による整音作業を経て発表されると、二〇〇五年山形国際ドキュメンタリー映画祭で小川伸介賞と国際批評家連盟賞をダブル受賞、同年のフランス・ナント三大陸映画祭ではドキュメンタリー部門最高賞（金の気球賞）を受賞するという快挙を成し遂げた。その後もヨーロッパやアジア各地の映画祭の招待作品になっているという。俄かには信じられないような話だが、一体どんな映画なのだろう？

幸いこの作品も自主上映のシステムが出来上がっており、上映委員会に問い合わせると、すぐに試写用のＶＨＳビデオを送っていただくことができた。

次の日曜の午後。さぁ観るぞ、と気合を入れてビデオを再生したのだが、何かどうも雰囲気が違うことに気づき、観続けるうちに困惑してきた。多くの受賞歴がある作品のはずなのだが、映像が、まさにリアルなホームビデオそのものなのである。加えて、状況について説明らしい説明がない。田園地帯にあるらしい撮影者の家には祖母・母・自分の女三代が暮らし、隣家に兄夫婦と子ども達が住んでいるようだが、それ以上の背景がよく見えてこないのである。さらに観続けるうちに、今度は段々居心地が悪くなってきた。「人さまの家の中をこんなに覗いていいのだろうか？」という戸惑いのような感覚である。何も特別なことは起きず、ひたすら日常の風景が続いていく。鏡の前で歯を磨く母。台所でブリ大根を煮る母。「食べる？」「カメラ持ってるから食べられないね」という会話。母の趣味である油絵の発表会の様子。ビデオを抱える娘と母が旅行に出ると、旅先の風景ではなくバスの中の母やホテルの部屋ではしゃいで母と同じフレームにおさまる娘しか映らない。仲の良い母娘だとは思ったが、

正直言って、他人のホームビデオを延々と観ても、さほど面白いとは思えないのである。ある場面から次の場面に移るときには、白だけの画面が「間」として挿入され、白の中に次の「章」のタイトルが浮かぶ。時折入院中の母の点滴姿が映り、彼女ががん治療を受けていることを思い出してハッとする。病気について何か変化が起きるのかと少し身構えるのだが、病院の場面は短時間で終わり、また自宅のシーンに戻る。途中、札束を手にしてほほ笑む母の姿が登場する（どうもがん保険がおりたらしい）。そのお金で購入したと思われる自家用車や家庭菜園用耕運機に喜ぶ母。「このホームビデオ、一体本当に編集したのだろうか……」と疑っているうちに、再生したまま不覚にも眠気を催してしまった。

ところが、一時間近くたったころ、章を区切る白い画面がそれまでより長く続いた次の場面。いきなり、顔に白い布をかけられて自宅の和室に安置される母の遺体が映しだされる。兄の子どもが布団のわきに座り、動かない母をじっと見つめる。出棺。それを見送る祖母。そのときふと、その一部始終が撮られていることの不自然さに気づく。なぜ娘は、自宅に戻ってきた母の遺体に、そして家を出ようとする母の棺に、頑ななまでにカメラを向けているのだろう？

その後場面は、母亡きあとの家に残された祖母と娘だけの暮らしへと続く。母が立っていた台所。母が弾いていた三味線。しかしそこに母はいない。玄関が何度も映るが、引き戸を開けて帰って来る人はいない。こたつからほとんど動かない祖母は、ホームビデオに映る母の姿を見るのが日課になっているようだ。映画の前半で延々と続いたホームビデオが、今度は画面の中のテレビに映し出される。はじめ無表情だった祖母は、亡き母のふざける姿を見つめ、声を聞くうちに、その顔にふわぁっと花びらがほころぶような笑顔を浮かべる。祖母はひたすらビデオの中の母の姿を見ている。おそらくそれは、もう何度もみた映像なのだろう。

最後にカメラは、コンポストから腐葉土を一輪車にのせ、母が丹精込めて手入れをした家庭菜園に運んでい

く娘本人の後ろ姿をとらえて終わる。そのラストシーンが唯一、娘の手からカメラが離れ、彼女の背中を撮った映像である。

「……一体、何?」

前半と後半の印象の違い。後半の画面から伝わる母の絶対的不在と寂寥感。撮影者が撮りたかったこと、伝えたかったことがよく飲み込めないまま、映画は終わってしまった。

その未消化の印象をひきずったまま、次の日曜日に二度目の再生をしてみた。すると、初めて観たときと映画がガラっと違って見えたのである。一時間三八分は、前半も含めて、今度はまったく冗長ではなかった。一度目には他人のホームビデオとしか思えなかった前半の母の映像に、ビデオカメラを向ける撮り手の痛いほどの思慕が感じられるのである。箒を三味線に見立ててふざけ、がん保険の札束を持ってほくそ笑んでみせた母はもういないことを、観る側も知っているからだろうか。一方撮られる母はというと、はじめはカメラに照れながらも、いつも意識がカメラそのものではなく、その向こうにいる娘に向けられている。カメラを通して娘に向けるまなざしが優しく、自然であり、深い絆が感じられるのである。そして母が亡くなったあとの後半の映像は、いきなり焦点が合ったような透徹さを見せ、撮ることへの一種の覚悟、あるいは決意とも呼べるような何かが立ち上ってくるように感じられたのだ。その本質は何なのだろう。この一種不思議な雰囲気が上映会になじむのかどうか今ひとつ自信はなかったが、この作品を第二回の上映作品として取り上げることにした。[5] とても嬉しいことに、監督であり、本作品に娘として登場する加藤治代さんにもご登壇いただけることになった。

五　第二回「生と死をめぐる映画上映会」

第二回上映会は、「ひめゆり」上映会から半年後の七月一二日、同じ医学部鉄門記念講堂で開かれた。今回も金曜夕方であったが、一五〇名ほどの聴衆が集まった。参加者アンケート（回答者九三名）によると、第二回も学内外の比は丁度半々で、「ひめゆり」上映会の聴衆は四割ほどが五十代以上だったが、「チーズとうじ虫」は四十代までが八割以上を占めた（十代・二十代が全体の三分の一）。初めて作品を観る人が前半で帰ってしまわぬよう、上映前に「不思議な映画ですが、どうか最後までご覧ください」と一応念を押したが、途中で席を立つ人はいなかった。

対談は、撮影の動機の話から始まった。母が当初の予想を超えて元気でいたとき、加藤さんは「もしかしたら奇跡的に治るかもしれないから、それを信じて撮影してみよう」と思い立ち、はじめから一つの作品をつくる目的でビデオカメラを購入したという。「絵に描いたような奇跡は一体いつ起きるんだろう」と思いつつ毎日の暮らしをおさめながら四年間続いた撮影は、しかし、母の病状が悪化したときに方向性を見失う。だが、映画の中に母が苦しむ姿は一切出てこない。

「奇跡を信じているくらいの気持ちで持っているカメラですから、そうじゃない状況のときに、カメラを持てないんですよね。しかも私は彼女の娘で、本当に母に執着しているんですよ。例えば、抗がん剤で吐いたりしますよね。そういう時に、カメラを持っている娘にはどうしてもなれないんですよ。そこが甘いところでもあるし、逆に言えば本当に私はただの娘っていうか、一番この人に対して〝治ってくれ〟と思っている人間がカメラを持っている。だから本当につらい時は、背中をさする手はあっても、カメラを持つ手はないと思っていました」

そして母が亡くなった翌朝、自宅で出棺を待つ遺体を前にして、加藤さんは泣きながら再びカメラを持つ。そのときは作品のことなど念頭になく、ただ「ここでやめたら負けてしまう」という思いに突き動かされていたという。そしてそれ以降、母が生きていた四年間とは異なり「自分は映像から何を言いたいのか」を考えるようになったという。

対談ではまた、最愛の母の死という現実と向き合うとき、撮りためた映像を編集する作業が結果的に加藤さんにとって一種セラピー的な効用をもたらしたことも話題になった。映像を突き放して客観的に観る編集作業が「それだけはどうしても考えたくなかった」母の死と自分の間に距離を獲得し、今を受け入れていく助けになったという。「自分の身に起こっていることを鏡のように観るために、〔編集は〕とてもいい道具だった」と加藤さんは振り返った。そして、自分に起こったことを遠くから見るような編集作業を続けるうち、「自分はこんなに悲しいけれど、これはどこにでもある話、誰にでも起こりうることで、自分の母親が自分より先に逝くのはごく自然のことだ」と徐々に気づいていけたのだという。[6]

「チーズとうじ虫」を喪失と哀しみの映画と見るか、そこからの再生の映画と感じるかは人によって異なるだろう。対談でも、この映画で結局何を言いたかったのか、という結論めいたことは話されなかった。対談終了後、ふと、この記録が母の死で中断せず一つの作品として完成したということ自体が大きなメッセージなのかもしれない、と思った。[7] 母が亡くなっても娘と祖母はこうして生き続けている。娘はビデオを撮ることをやめず、祖母も母の映像を見て微笑み、二人は暮らし続けている。そのこと自体が、結果的に聴衆の中に深い感動を呼び起こすのではないだろうか。愛する人を失っても、人はこうして生きていく、これは誰の身にも起きることなのだ、と、ストンとわかるような感覚。同じことが自分の身に起きても、その人を思い出しながらきっと生きていけるという静かな励まし。それらは加藤さんのお話を伺って後から考えたことだが、それもま

た監督のお話を伺える上映会の醍醐味と言えよう。

作品パンフレットに収載されたインタビューの中で加藤さんは、映画の章の区切りに使われる白い画面について「白という色のイメージは、何もなくて、無という印象があります。無だけど黒ではない。固まりになる前のチーズの原型である牛乳の白であったり、なにも描かれていないキャンパスの白だったり。白は何もないけど、可能性だったり、大切なことを表している感じがします」と語っている。とすると、牛乳の白い色の中からうじ虫のように思いがけず現れる日常は、それ自体が奇跡のようなものなのかもしれない。

終了後、「ひめゆり」上映会のときと同様、聴衆の多くがすぐに席を立たずアンケートに答えてくれた。コメントの多くは、この映画を自分自身の過去の体験やこれから自分や家族の身に起きるかもしれないことに引き寄せて書かれていた。

非常に感動しました。ありふれた家庭のありふれた人間のありふれた日常の断片がつづられているだけなのに、おそらくそうであるが故に、人間の生の大切なことは、何かを成し遂げたとか何かを残したとかいうことではなく、生まれてから死ぬまでの一日一日のすべてであるということが強く感じられました。個人的な映像でありながら、伝わってくるものは（全編通して）まったく個人的ではありませんでした。（四十代、一般）

今回で観るのは三回目です。そして最も心に響きました。ありがとうございます。日常の一つ一つのシーンが切実でした。この映像を撮るのは監督にとって祈りだったのでしょうか。（三十代、教職員）

私は偶然、この映画を観にきたのですが、父が亡くなって一ヶ月経っていないです。とてもおだやかな気持ちになりました。（四十代、一般）

私にとって介護や両親の死とは「まだ遠いけど確かにそこにある」問題です。誰にでも起こることだけど、まだ私には起こっていないこと。それを少し見せていただいたような気がしました。映像も綺麗でした。「生きていること」や「生活」はただそれだけでいいものだと思いました。（三十代、一般）

もっと暗い内容なのかと思っていました。とても個人的な内容にも関わらず、「人との関わりの中で、どのように人が生れ死にゆくのか」という普遍的なものに思え、涙も出るけどさわやかなものさえ感じました。一人の時間は一方から一方へと流れていくのかもしれないけれど、一人と一人が関わると、時間というのは行きつ戻りつしながら、過去の時間も変化していくこともあるのかも、と、生死と生死の関わりについて自分なりの感覚を新しくつかむことができました。（十代・二十代、学生）

海外の映画祭でこの映画を見た観客は、死生観や宗教のような抽象的な話ではなく、自分の家族の病気や死について監督に語ること多いという。加藤さんが直視した母の死とその後の記録は、観る者一人一人に確かに響き、その人と家族とを結びつけているように思えた。

六　まとめにかえて

無料の上映会と監督自身による解説やフロアとのやりとり。それは、何かを分析するのではなく、作品のうしろにある作り手の存在や登場する人々との関係性を「感じる」時間であった。上映会は参加者にとって、生や死をそれまでとは違った角度からとらえるきっかけになったのではないかと思う。

最後に、柴田昌平監督と加藤治代監督、上映会に向けて沢山のアドバイスを下さったプロダクション・エイシアと「チーズとうじ虫」上映委員会の皆様、そして、作品を最良の状態で上映するためにご尽力くださった視聴覚センタースタッフの皆様、すべてにおいて実に細やかにサポートしてくださったＣＯＥ研究員の皆様に深く御礼申し上げたい。映画を媒体として多くの人が集い、二つの稀有な作品の感動を共有できたことに、心から感謝したい。

■註

1　沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校は財政的な理由から大正五年に併置校となり、学園内の施設を共有し、同じ教員に学ぶという姉妹校のような関係にあった。併置前からそれぞれ校友会誌を持ち、一高女は「乙姫」、師範は「白百合」と名づけられていたが、併置時に校友会誌も統合され、両方の名前を合わせて「姫百合」と名づけられた。ひらがなで「ひめゆり」と表記されるようになったのは戦後である。（ひめゆり平和祈念資料館ホームページより http://www.himeyuri.or.jp/intro.html　二〇一〇年一月一九日アクセス）

2　屋外で時間を区切らず撮影を続けることは、雲の流れや光の変化に応じた露出調整や証言者の身体の動きに伴うピン

トの維持など、カメラマンにとって技術上極めて困難な作業を要するという。しかしその作業を担当する澤幡正範カメラマンからの提案により、「ひめゆり」では、証言者が語り尽くすまでテープを廻し続けることになった。（長編ドキュメンタリー映画「ひめゆり」公式パンフレット、五六頁）

3 佐藤（佐久間）りか「ドキュメンタリー映画『ひめゆり』が教えてくれた〝語り〟の力」「緩和ケア」一八巻三号、二〇〇八年。

4 作品のタイトル「チーズとうじ虫」は、イタリア出身の歴史家カルロ・ギンズブルグの同名の書籍に紹介された一六世紀のイタリア人粉挽き屋のメノッキオの言葉を引用したものである。異端者として告発され焚刑に処されたメノッキオは、裁判の中で自らの宇宙観について以下のように述べた。「私が考え信じているのは、すべてはカオスである、すなわち、土、空気、水、比、などこれらの全体は次第に固まりになっていった。ちょうど牛乳のなかからチーズの固まりができ、そこからうじ虫があらわれてくるように、このうじ虫のように出現してくるものが天使たちなのだ。」（カルロ・ギンズブルグ著「チーズとうじ虫」杉山光信訳、みすず書房、二〇〇三年）

5 同じく試写用ビデオを観た上廣死生学講座講師の山崎浩司さんにも上映を勧めていただいた。山崎さんは、本作品を「写実的な西洋画ではなく、日本画の連作を観ているような感覚」と評した。すべてを撮りきるのではなく、撮れなかったものをそのまま残したという意味でも、この作品の重要点の一つはまさに「間」だったと言えるだろう。

6 編集中は絶対に泣かないと決めていた加藤さんだが、完成した映画を観ると今でも涙が出るという。しかしそれはとても幸せな涙であり、愛する人の映像や声が残る意味について「会いたくなったらピって再生を押せばそこにいる安心感がある」「家族がとても楽しかったり幸せだったりする時にカメラを向けておくと、亡くなった時の準備をするという意味ではなくて、とても前向きな意味で、それが記憶として背中を押してくれることがあると実感している」と対談の中で話されていた。

7 加藤さんは、本作品に関するエッセイの中で「ひとつだけ自分でエライと思ってしまうのは病気に勝つことはできなかったけれど私達は決して負けもしなかったという事。その時私にとってカメラが強い武器になっていた事は言うまでもありません。」と書いている。（ドキュメンタリー映画の最前線メールマガジン neoneo、三二号 二〇〇五

年三月一五日発行）

（たかはし・みやこ　獨協医科大学医学部公衆衛生学講座准教授）

正誤表

p. 14　最終行

（誤）　だって[友達は]別れた時の顔をしてい

（正）　だって[友達は]別れた時の顔をしていますから。